

山園町遺跡調査報告Ⅱ

— 平成19年度、谷内（2）地区急傾斜地崩壊対策事業に伴う調査 —

2007年11月

高岡市教育委員会



序

「山園町遺跡」は、高岡市街地の北側、山園町や二上院内地区にあります。この地区は二上山の南麓にあり、丘陵の末端部と開析谷に遺跡が営まれています。

当遺跡中央の丘陵には射水神社の拝社、院内社が鎮座しており、その参道工事時には墳墓と思われる中世の地下式壙が発見され、周辺の丘陵斜面地では中世段階での人的活動を示す遺構群も確認されています。また、二上山の谷部や丘陵においても古墳を始めたとした様々な遺跡が存在することも確認されています。

この度報告いたしますのは、急傾斜地崩壊対策事業に伴い、平成19年度に実施した発掘調査の成果です。

最後になりましたが、発掘調査にご協力頂きました、関係各位、地元の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成19年11月

高岡市教育委員会
教育長 村井 和

例　言

1. 本書は富山県高岡市における谷内（2）地区急傾斜地崩壊対策事業に伴う、山園町遺跡の発掘調査の報告書である。
2. 当調査は、高岡市建設部土木維持課の委託を受けて、高岡市教育委員会が実施した。
3. 調査実務については、株式会社エイ・テックの協力を得た。
4. 調査地区は高岡市山園町、二上院内地内である。
5. 現地調査は、平成19年5月14日～7月6日に実施した。
6. 調査関係者は以下の通りである。

[高岡市教育委員会文化財課]
文化財課長：笠島千恵子
〔埋蔵文化財担当〕
主幹：木林弘吉
副主幹：山川辰一
主任：荒井隆
[株式会社エイ・テック]
代表取締役：谷口猛
〔文化財調査部〕
調査員：桶谷潤
調査員：宮脇満
7. 当調査は山口・荒井・桶谷・宮脇が担当した。
8. 本書の執筆は桶谷が担当し、山口が加除・修正した。

調査参加者名簿

発掘 安藤誠吾、河原康弘、上坂哲也、小林央、沢田和明、新堂秀次、高岡誠一、中山賢宮
松木雄祐、山崎一男、山城一夫
整理 安藤誠吾、上坂哲也、小島智子、小林央、菅谷万須美、杉恵理子、竹部光希、西川愛

目 次

序
例 言
目 次

| | |
|-----------------|----|
| 第Ⅰ章 序 説 | 1 |
| 1. 地理的歴史的環境 | 1 |
| 2. 遺跡概観 | 3 |
| 3. 調査経過 | 5 |
| 第Ⅱ章 遺 構 | 9 |
| 1. 橫穴状遺構 S X01 | 9 |
| 2. 平坦面 S X02 | 9 |
| 3. 性格不明遺構 S X03 | 9 |
| 第Ⅲ章 遺 物 | 10 |
| 1. 古墳時代の土器類 | 10 |
| 2. 中世の土器類 | 10 |
| 3. 石製品 | 11 |
| 第Ⅳ章 総 括 | 12 |

図面目次

- 図面01～図面06 遺構実測図
図面07・図面08 遺物実測図

図版目次

- 図版01・図版02 遺跡写真
図版03～図版06 遺構写真
図版07・図版08 遺物写真

挿図目次

| | |
|----------------------------------|---|
| 第1図 遺跡位置図 [1] (1/15万) | 1 |
| 第2図 遺跡位置図 [2] (1/5万) | 3 |
| 第3図 周囲の遺跡分布図 (1/5,000) | 4 |
| 第4図 調査地区位置図 (1/2,500) | 5 |
| 第5図 二上山周辺急傾斜地崩壊危険地域等位置図 (1/2万5千) | 6 |
| 第6図 試掘調査地区平面図 (1/200) | 7 |
| 第7図 本発掘調査地区遺構図 (1/200) | 8 |

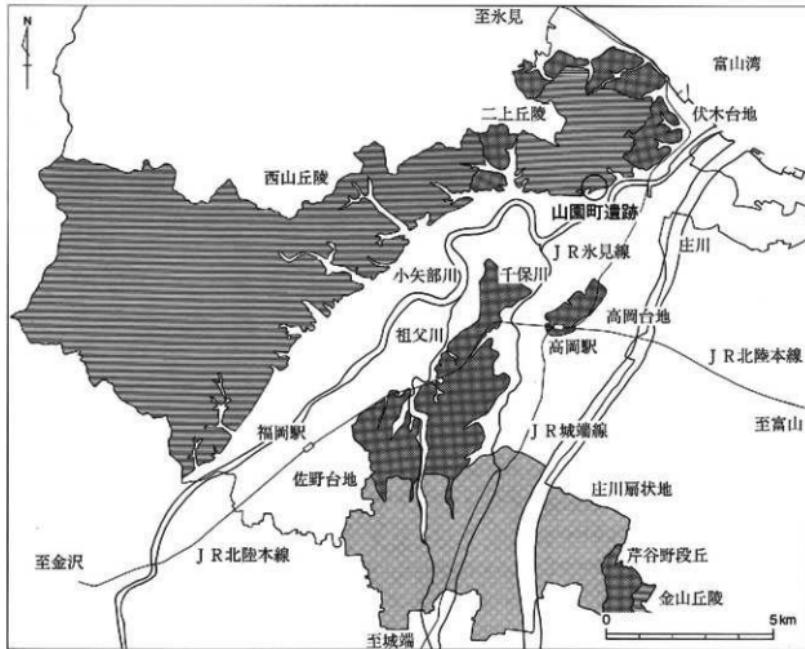
第一章 序 説

1. 地理的歴史的環境

地理的位置

高岡市の北西側に西山丘陵が拡がり、東側の二上山丘陵へと続いている。その脇を沿うように小矢部川が蛇行しながら流れている。平野部は、庄川が氾濫を繰り返しながら扇状地を形成した。北側は富山湾を臨み、南西側には金山丘陵より抜がる芹谷野段丘がある。

山岡町遺跡は、JR高岡駅の北方約4km、伏木駅から南西約3kmに位置する。二上山南麓の中央部にあたる丘陵地と、その開折谷からなり、中央部奥の丘陵には射水神社の摂社、院内社が鎮座している。丘陵地上部には古墳が確認され、斜面末端部には中世から形成されたと思われる集落が展開されている。また当遺跡が存在する二上丘陵には鳥越古墳群、院内古墳群、院内東横穴墓等といった遺跡が数多く確認されている。



第1図 遺跡位置図【1】(1／15万)

旧二上村

旧二上村は高岡市の現行大字で、明治22年に、二上、下八ヶ新、守護町、南八ヶ新、守護町新、波り、二上新の7つが合併し成立した。また大正6年には、掛開発村の大字「城光寺」が加わっている。高岡市の北部、二上山南麓に位置し、西側から東側に小矢部川が曲流している。上二上、谷内、院内、城光寺の集落は二上山山麓沿いに西側から東側に展開しており、下二上は、小矢部川寄りの平野部側に位置している。

二上院内

二上山南麓の東側に位置する谷部は、院内ないし二上院内と呼ばれている。院内の谷部は樹枝状に三分されており、東側の最も深い谷が院内大谷である。院内地区は昭和37年に団地造成が行われ、山側町と称されている。

二上山

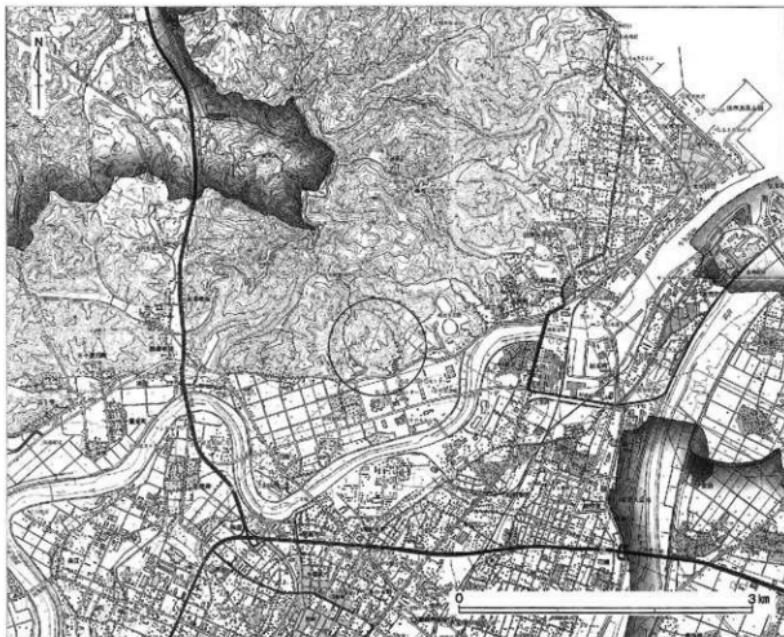
二上山は西側の西山丘陵と海老坂断層により分かれ、南北3.5km、東西4.5kmの山塊を成している。二上山は数々の峰からなり、主峰（東峰、奥の御前、274m）、西峰（城山、259m）がある。北側には大師ヶ岳（254m）、小竹山（摩頂山、251m）、東側には鉢伏山（211m）がある。北東側は富山湾に臨み、東側には伏木台地があり、小矢部川、庄川の河口がある。西側は海老坂峠があり、国道160号が水見方向へ走る。南側は射水平野が広がる。二上山は東北東に主軸を取るドーム状構造で、第3紀の新生代中新世及び鮮新世を主体とする地層からなり、その周辺を第4紀の地層が取り巻いている。二上山南麓には、伏木欠田から城光寺北側にかけて分布する矢田砂岩層と、城光寺から谷内付近にかけて分布する城光寺泥岩層がみとめられている。

二上神

二上山は古くから信仰の対象とされ、二上山に宿っているとされる神が二上神である。『万葉集』集録の大伴家持の「二上山の賦一首」にも二上山の神が詠まれている。二上神は宝龟11年（780年）に從五位下に叙せられたことが『続日本紀』に記されたのを始め、六国史等に6回記載されている。貞觀元年（859年）には正三位に登っているが、その後の記録等から二上神の名はなくなる。『延喜式』神名帳には、射水神社の記載はあるが、二上神の記載がないということや、おりからの式内社への関心の高まりから、射水神社を二上神に比定する見解が現れ、近世から近代にかけて定着していった。明治4年（1872年）に二上神社を式内社の射水神社とし、国幣中社とされた。明治8年（1876年）には市街地中心部にある古城公園に移設され、二上山南麓の二上神社は射水神社の分社となった。大正11年（1922年）に祭神として二上神が復活している。戦後、二上山南麓の射水神社は、越中總社射水神社として独立し、今日に至っている。史料的にも不明確ではあるが、二上神や二上神社の祭りは、二上山の神に対する古代の信仰に由来しているものといえる。

交通路

古代北陸道は小矢部川左岸から西山丘陵の裾部を通り、二上付近に至るとされている。小矢部川を渡河せず北東へ進むと越中国府へと達する。高岡市麻生谷付近に川人駅があり、曰理駅を経て白城駅に至ったとされている。曰理駅の所在地については明確にされていないが、地名や考古資料、効率的交通路の設定等の観点から二上地内とする見解がある。また南北朝時代においては、越中守護職にあった斯波氏の守護所が二上地内に置かれていたとされている。近世には、水見への往来として海老坂峠を越えて水見に通じる交通路として機能し、旧庄川と千保川との合流地点といった立地条件を背景に水運も発達した。このように二上地内は、古代以来いくつかの交通路の要所になってきた所である。



第2図 遺跡位置図〔2〕(1／5万)

2. 遺跡概観

山園町遺跡

山園町遺跡は、開発に伴う発掘調査を幾度か実施し、その調査結果を報告している。

平成3年度に射水神社の振社である院内社の参道整備に伴う工事によって、地下の空洞が発見され、調査の結果、東西に玄室を有する中世地下式壇と判明した。同年度に『市内遺跡調査概報Ⅲ』で報告している。

平成11年度から、谷内（2）地区急傾斜地崩壊対策事業に伴う斜面の擁壁工事が行われることにより、4年間にわたり発掘調査を実施した。ここでは横穴を始め、土坑、溝、基壇状遺構、土壘状遺構、濠状遺構、平坦面等の遺構や土器、土製品、石製品といった遺物が確認された。平成15年度に『山園町遺跡調査報告』で報告している。

平成17年度には沙魚谷砂防改良工事に伴い、試掘調査を実施した。遺構では平坦面が、遺物では珠洲、五輪塔が確認された。平成19年度に『二上谷内遺跡調査概報』で報告している。

院内東横穴墓

平成7年度に小矢部川水系院内大谷砂防改良工事に伴う東側擁壁工事が行われた際、斜面に穴が発見された。調査の結果、横穴墓であることを確認した。横穴墓の中からは直刀、刀子、金環、ガラス小玉が出土している。平成9年度に『院内東横穴墓調査報告』で報告している。

山園町遺跡周辺の古墳群

山園町を取り囲む4条の丘陵尾部の尾根上には、それぞれ古墳群が存在している。西側から鳥越古墳群C支群、院内古墳群B支群、院内古墳群A支群、城光寺古墳群C支群である。

鳥越古墳群C支群は、「二上まなび交流館」（旧県立二上青少年の家）のある鳥越台地から東へ延びる丘陵の先端部に位置し、前方後方墳1基と方墳2基、円墳1基があったが、最先端に位置した円墳は近年の急傾斜地改良工事で消滅した。院内古墳群B支群には円墳4基があり、北西側の丘陵先端部に位置する。北側の丘陵尾部、射水神社の拝殿である院内社の背後には院内古墳群A支群がある。方墳が4基確認されている。城光寺古墳群C支群は、東北東側の二上塩田から延びる丘陵先端部に位置し、円墳1基、方墳2基がある。

この他にも丘陵西側には東海老坂ダイラ古墳群、東海老坂ムカイ山古墳群、二上古墳群、谷内古墳群等があり、東側には東上野古墳群、守山古墳群等多くの古墳群の存在が確認されている。



第3図 周囲の遺跡分布図 (1 / 5,000)

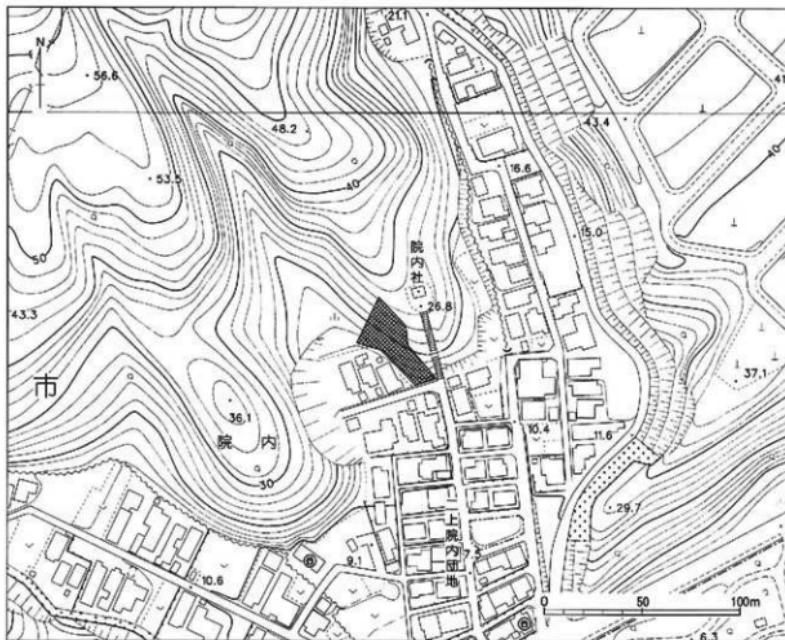
3. 調査経過

調査に至る経緯

高岡市の北側、二上丘陵から海老坂の断層崖を介して西方には西山丘陵が続いている。これらの丘陵は樹枝状の谷を発達させるとともに、急傾斜の地形となり、災害が発生しやすい所となっている。

山園町は二上山南麓に位置し、丘陵尾部で開まれた谷地形の中にある。昭和37年の宅地造成時に土器類の出土をみており、山園町遺跡として周知の埋蔵文化財包蔵地となっている。また山園町とその周辺一帯は「谷内（2）地区急傾斜地崩壊危険箇所」とされている所もある。

平成18年8月に高岡市建設部土木維持課より、谷内（2）地区急傾斜地を対象とする急傾斜地崩壊防止工事計画の報告を受け、同年9月に現地での協議の結果、埋蔵文化財の試掘調査を実施することとなった。調査地区は山園町の北側の丘陵、射水神社の浜社・院内社の南西側斜面にある。まず予備調査（第1次試掘調査）を行い、その結果、さらなる試掘調査が必要と判断されたので確認調査（第2次試掘調査）を実施した。そして平成19年度に本調査（本発掘調査）を実施するに至った。



調査期間

調査における現地調査期間・調査面積は以下の通りである。

平成18年9月25日～9月29日：第1次試掘調査、調査面積30m²

同年10月17日～11月16日：第2次試掘調査、調査面積127m²

平成19年5月14日～7月6日：本発掘調査

平成18年度の調査は、高岡市教育委員会が調査主体で、山口辰一・荒井隆が調査担当として実施した。

平成19年度の調査は、高岡市教育委員会が調査主体で、株式会社エイ・テックの協力を得た。調査担当は、教育委員会の山口・荒井、エイ・テックの植谷潤・宮藤満である。

検出遺構

調査において検出した遺構は以下の通りである。

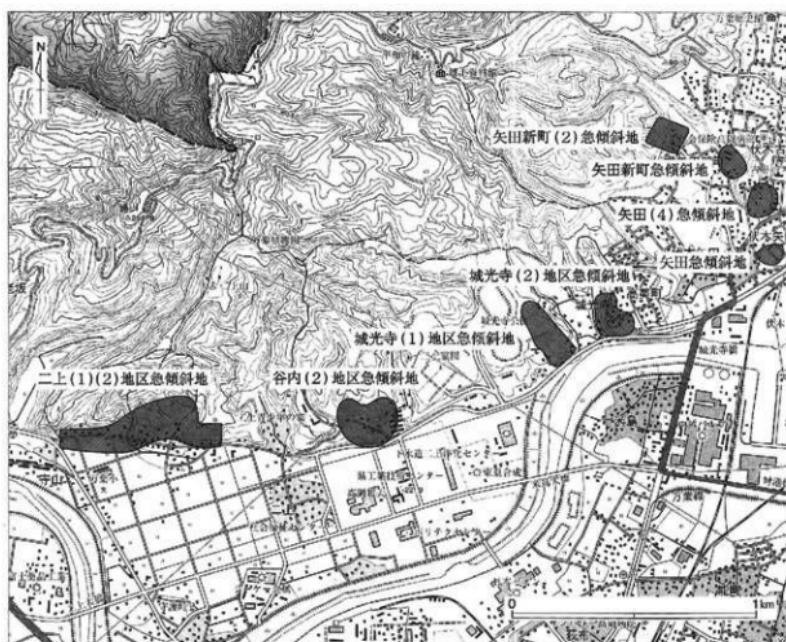
横穴状遺構：1基、平坦面：1箇所、性格不明遺構：1箇所

出土遺物

調査地区全体から出土した遺物は以下の通りである。

土器類：土師器、須恵器、珠洲

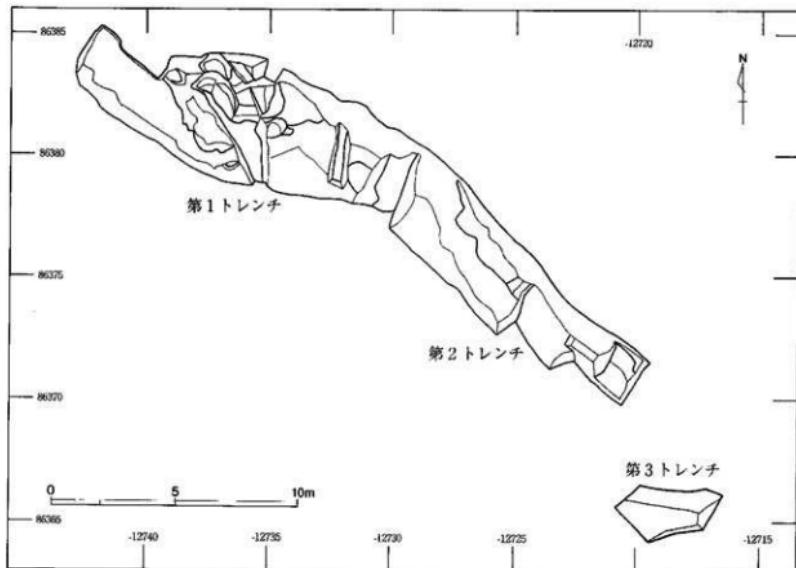
石製品：砥石



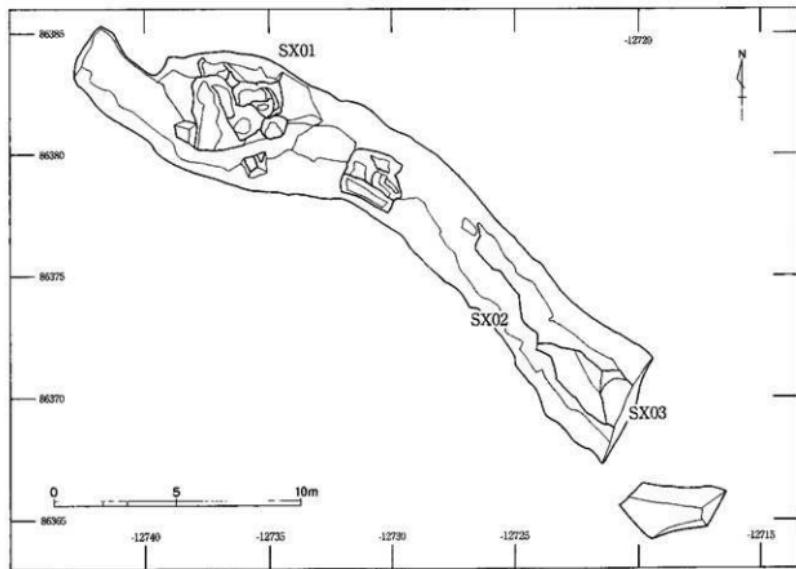
第5図 二上山周辺急傾斜地崩壊危険地区等位置図（1／2万5千）

試掘調査

平成18年9月、査定に先立ち調査地区の樹木の伐採がなされた。伐採後の9月25日より試掘調査を行った。調査地区が丘陵斜面地であるため、比較的平坦な部分と、地表に近い部分に試掘坑を3箇所設定して掘削を開始した。今回の調査地区は、院内社参道地区と同じ丘陵の南西側斜面地ということから、地下式横と間違する遺構の存在が考えられたため、掘削作業は慎重に行った。掘削は人力により行ったが、表土には樹木の根が多数残り難航した。3箇所の試掘坑のうち2箇所で遺構と思われる整形跡と、古墳時代から中世の遺物を確認したが、これ以上の掘削には足場等の設置が必要であると判断し、9月29日をもって作業を一時中断した。再度協議し、試掘坑を抜け全体にわたる確認が必要との判断により、10月17日に樹木の根が多く残っている表土をバックホーで除去し、翌18日から足場を設置しての調査再開となった。再開後は、前回遺構を確認した周辺を中心に、可能な限り掘削範囲を抜け、斜面地の崩壊に注意しつつ慎重に作業を進めた。調査地区北西側では、横穴墓の墓前域と供養の可能性が考えられる遺構を確認し、中央部及び中央南側では、遺物を多く含む土溜まりを確認した。この調査結果を踏まえ、さらに厳密な調査が必要であると判断し、協議の結果翌年に本発掘調査を行うこととなった。



第6図 試掘調査地区平面図 (1 / 200)



第7図 本発掘調査地区遺構図 (1/200)

本発掘調査

平成19年5月14日、再度作業のための足場を設置、6月4日より前年の調査で確認した遺構と思われる箇所とその周辺の検出作業、掘り下げ作業、一部拡張作業を開始した。その結果調査地区北側では、横穴に付随する前部と思われる整形跡と、調査地区北面奥壁にU字型の掘り込みがあることが確認できた。調査地区中央では、四角形をした遺物を含んだ土溜まりを検出していたが、かなりの部分が樹木の根による搅乱を受け原型を止めているため、遺構とは判断しなかった。調査地区南側でも遺物を含む土溜まりを検出していたため、南東端を拡張し全体を精査した。その結果、一部で平坦に整形したと思われる箇所を確認した。また南東端でも深さが約70cmの整形された窪みを確認した。さらなる確認のためには拡張の必要が考えられたのだが、斜面の崩落の危険や調査地区範囲の限界もあり断念した。そのために現況での遺構の性格の把握に努め、足場の解体、測量調査及び写真撮影を行い、7月6日に現場作業を終了した。

記録作成

記録の作成のうち、写真撮影は6×8判白黒フィルム、6×8判リバーサルフィルム、35mm判各フィルムを使用した。全景写真的撮影については、地上から行うもののほか、無線操縦ヘリコプターによる空中写真撮影を行った。測量による図面の作成は、調査地区全体図を100分の1の縮尺でを行い、遺構平面図、遺構断面図を20分の1の縮尺で行った。また斜面地という特性を考慮して、3D測量も実施した。

グリッド

調査地区的グリッドは世界測地系の平面直角座標系の第VII座標系（原点は北緯36° 00' 00''、東経137° 10' 00''）に合わせた。調査地区平面図には南北方向、東西方向に座標の数字を表記した。

第Ⅱ章 遺構

1. 横穴状遺構 S X 01 (図面 01 ~ 03、図版 04・06)

本調査地区北西側に位置している。標高は約 17.3 m である。主軸は北 16 度西を向き、南東方向に開口するものである。調査開始時は埋没していた。掘削を進めるに従って調査地区北面奥壁で U 字形の堆積と、前庭部と推測される整形跡が確認された。整形跡は東西に約 3.6 m、南北に約 3.1 m の三角形をしており、北から南へと約 70 cm の高低差で傾斜している。また、三角形の中でおおまかに 3 段に分かれ、各段の中心部が窪んでいる。U 字形の堆積については、調査地区範囲で可能な限りの拡張を試み、遺構の性格の把握に努めた。しかし、整形跡から奥壁に約 60 cm の所までの確認に止まった。確認した結果、床と思われる部分が平坦に作られ、東側は外に膨らみながら斜面に入り込んでいくことが分かった。穴の形がドーム状を呈するものと推測した。遺構の全体像が確認できていないため横穴との判断は下せないが、平成 12 年度の調査で確認された第 1・3・4 号横穴の整形跡と、今回の調査で確認した整形跡の形状が非常に似ていること等を踏まえて、今回は横穴状遺構と位置付けをした。

遺物は表土中より珠洲、砥石が出土している。図示した遺物は図面 08-4002 である。

2. 平坦面 S X 02 (図面 04~06、図版 05・06)

本調査地区南東側、南側に傾斜する斜面中腹の標高約 16.0 m に位置する。北西~南東方向に長さ約 8.8 m 以上、幅約 0.4 ~ 1 m 以上を計る。北西方向から南東方向へと約 70 cm の高低差で傾斜している。検出した平坦面の北西端、南東端とともに斜面側に入り込んでいく。調査地区範囲の関係や人家の背後という位置的な問題、崩落の危険性もあり、拡張による全体的な確認を断念したため、明確な掘り方や規模は分からなかつたが、検出した形状から平坦面として判断した。

遺物は表土中及び堆積土より、土師器、須恵器、珠洲が出土している。図示した遺物は図面 07-1001 ~ 1004、2001、2002、3001 ~ 3003 である。

3. 性格不明遺構 S X 03 (図面 04~06、図版 05・06)

本調査地区南端、平坦面 S X 02 の南東側に位置する。標高は約 15.3 ~ 16.0 m、長軸 2.0 m 以上、短軸 1.1 m 以上、深さ約 70 cm を計る。本発掘調査で南東側を拡張した際に検出された遺構である。遺構の覆土は崩落上と思われ、その上には遺物を含んだ層が台形状に堆積していた。北側及び南東側に遺構の拡張があると思われたが、平坦面 S X 02 と同じ理由でこれ以上の拡張を断念したため、全体的な形状の把握には至らなかった。このため今回は性格不明遺構とした。

遺物は堆積土より土師器が出土している。

第Ⅲ章 遺 物

1. 古墳時代の土器類

6世紀頃の土器で、出土点数は僅かである。

土師器

高杯 図面07-1001。低脚高杯の脚部である。底径7.0cmを計る。

須恵器

杯蓋 図面07-2001。杯蓋の天井部である。

提瓶の口(?) 図面07-2002。提瓶の口縁部と思われる。口径11.6cmを計る。

2. 中世の土器類

今回最も多く出土している土器類である。

土師器

皿 図面07-1002。口径8.7cmを計る。非クロコ整形、手づくね整形によるものである。口縁部に一段の横ナデを施す。体・底部はナデによって調整する。煤状のものが付着している。

杯 図面07-1003。口径7.2cm、器高1.8cm、底径3.0cmを計る。全体が磨滅している。口縁部に一段の横ナデを施す。体・底部はナデによって調整する。

羽釜 図面07-1004。羽釜の口縁部である。口径31.0cmを計る。外面は横ナデ、一部カキ目を施し、煤が付着している。内面の調整は刷毛目である。

珠洲

擂鉢口縁部 図面07-3001・3002。3001は口径28.6cmを計る。オロシ目幅は3.0cmで、条数は10条である。3002は口径23.4cmを計る。口縁部内部に柳目波状紋が付く。

擂鉢底部 図面07-3003。底径15.0cmを計る。オロシ目幅は2.6cmで、条数は10条である。

鉢形底部 図面07-3004・3005。鉢ないし壺の底部である。外面底部の調整手法は糸切りである。3004は底径9.0cmを計る。3005は底径13.8cmを計る。

甕底部 図面07-3006。底径15.4cmを計る。外面体部は叩き目を施し、底部は離れ砂痕がある。内面の調整は横ナデ・ナデである。

3. 石製品

砥石 図面08-4001・4002。4001は調査地区中央付近で出土したものである。砂岩製で、灰褐色を呈する。両端部に使用痕がみられる。一部欠損するが、短箇面1面と長箇面すべての5面が使用されている。4002は平成18年度試掘調査で、S X01周辺の表土から出土したものである。滑石製で、石鍋の破片を砥石として二次的転用したものと思われる。やや内湾し、端部付近には内面から外面へ直径約1.0cmの穿孔を施す。両面ともに鑿等の工具による調整痕がみられるが、これは石鍋を作る段階で施されたものと思われる。砥石としては、内面端部と1側面を使用している。

第Ⅳ章 総括

山岡町遺跡は住宅団地造成時に遺物の出土が確認され周知の遺跡となった。その後幾度かの工事に伴う発掘調査が行われている。

平成3年度に行われた参道地区の調査時に発見された地下式塙は県内では類例をみない形態の墓制で、地表面から約1.6m掘り下がった所に入口部があり、そこから東西に玄室が作られた構造となっている。構築された時期については出土遺物から15世紀代のものとされている。

平成11年度からは4年にわたり谷内（2）地区急傾斜地崩壊対策事業に伴う調査が行われた。初年度試掘調査では横穴と思われる開口部が発見され、翌年度の本発掘調査で5基の横穴と平坦面等の遺構が確認された。出土遺物から中世の所産であると考えられている。平成13年度の調査時にも平坦面が確認されており、中世の遺物の出土が報告されている。その中には仏具に関する特殊な遺物である珠洲の灯明台形製品や南北朝時代のものと思われる五輪塔の火輪があり、寺院やそれに付随する遺構の存在が考えられる。また平成14年度の調査では基礎状遺構やL型状遺構、濠状遺構等に加え平坦面が確認されており、遺構の位置関係をみると規則的に配置され、何らかの構築物の可能性が考えられる。調査地区全体における出土遺物は13-14世紀が主な時期となっている。また、確認された遺構の構築時期もこれに該当すると考えられている。

平成17年度には、今回の調査地区がある丘陵と平成12年度の調査で横穴が確認されている丘陵との谷部にあたる部分で、沙魚谷砂防改良工事に伴い試掘調査が行われ、平坦面が確認された。出土遺物の時期から中世に構築されたものであると報告されている。

今回の調査では3箇所の遺構を確認した。横穴状遺構1基、平坦面1箇所、性格不明遺構1箇所である。いずれも安定した黄褐色粘土層に構築されており、これは新第3紀層でこの付近の基盤層になっている。確認した遺構すべてにおいて全体の形状及び範囲の把握ができず、また遺構に伴うと思われる遺物が出土していないため、明確な時期の特定を行うことができなかった。しかし、調査地区内から出土した遺物の時期が周辺の遺跡とはほぼ同時期にあたることや、平成12年度の調査時に確認されている横穴の形状と非常に似た整形跡が確認されたこと、今回の調査地区が地下式塙と同じ丘陵の南側斜面に位置し、横穴が確認された丘陵とも隣接していること等の理由で、中世地下式塙や横穴と同じ中世の遺物である可能性が高いと推測している。

中世地下式塙は寺院との密接な関係があるといわれており、隣接する丘陵にも宗教的意味合いを持つと思われる遺構・遺物が確認されていることからも、今回の調査で確認した遺構が寺院等に付随する可能性も考えられる。

これまでの調査報告により、山岡町遺跡は中世を主体とした遺跡で、遺跡範囲は丘陵周辺を含む谷部のほぼ全域に広がるといえる。しかし明確に遺跡全体の性格を断定できるまでの結果は得られておらず、今回の調査においても推測の域を超えるものではない。

当遺跡は平野部に突出形の丘陵を持ち、その丘陵尾根部にはいくつもの古墳群が確認されている。このような形態を持つ場所の周辺には横穴墓が存在している場合が多いとされており、これまでに確認されている横穴も古墳時代に構築され中世段階で改変された可能性があると考えられている。今回僅かではあるが古墳時代の遺物が出土しているが、この時代に関連する遺構の存在は確認できなかった。丘陵の古墳群や墓の可

能性がある横穴の存在等を考えると、今回の横穴状遺構の形状特定に至らなかつたことが残念である。

今後二上山全域や周辺地域での寺院等の調査の進展によって、当遺跡の性格が明らかにされていくことを期待したい。

参考文献

- 荒井 隆 2004 「山園町遺跡調査報告」 高岡市教育委員会
豊島 耕他 1978 「二上の歴史」 二上郷土誌編纂委員会
西井 龍儀 1983 「二上周辺の古墳」 [昭和57年度高岡市埋蔵文化財調査概報] 高岡市教育委員会
西井 龍儀 1999 「高岡市鳥越古墳群」「富山平野の出現期古墳」 富山考古学会
日沖 利史 2001 「頭川城ヶ平横穴墓群調査報告Ⅲ」 高岡市教育委員会
古岡英明他 1991 「たかおか－歴史との出会い－」 高岡市市制100年記念誌編集委員会
山口 長一 1993 「市内遺跡調査概報Ⅳ」 高岡市教育委員会
山口 長一 1998 「院内東横穴墓調査報告」 高岡市教育委員会

報告書抄録

| ふりがな | やまぞのちょういせきちょうさほうこくに | | | | | | |
|---------------------|-------------------------------|-------------|---------------------|-------------------|--------------------|------------------|-------------------------------------|
| 書名 | 山園町遺跡調査報告Ⅱ | | | | | | |
| 副書名 | 平成19年度、谷内（2）地区急傾斜地崩壊対策事業に伴う調査 | | | | | | |
| 巻次 | | | | | | | |
| シリーズ名 | 高岡市埋蔵文化財調査報告 | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第15回 | | | | | | |
| 編著者名 | 山口辰一、桶谷潤 | | | | | | |
| 編集機関 | 高岡市教育委員会 | | | | | | |
| 所在地 | 〒933-0057 富山県高岡市広小路7番50号 | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦 2007年11月30日 | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡 | 所在地 市町村 | コード 遺跡番号 | 北緯 度 | 東経 度 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
| やまぞのちょういせき 山園町遺跡 | 富山県高岡市 山園町 | 016202 | 202012 | 36° 46° 34° | 137° 01' 34" | 070514 070706 | 157m ² 急傾斜地崩壊 対策工事 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 | | |
| 山園町遺跡 | 散布地 | 中世 | 横穴状遺構、平坦面 性格不明遺構 | 土師器、須恵器 珠洲、磁石 | | | |

第三回

図面

図面目次

- 図面01 遺構実測図 横穴状遺構 S X01平面図・立面図 (1/40)
- 図面02 遺構実測図 横穴状遺構 S X01遺構実測図〔1〕 (1/80)
- 図面03 遺構実測図 横穴状遺構 S X01遺構実測図〔2〕 (1/80)
- 図面04 遺構実測図 平坦面 S X02・性格不明遺構 S X03平面図・立面図 (1/80)
- 図面05 遺構実測図 平坦面 S X02・性格不明遺構 S X03遺構実測図〔1〕 (1/80)
- 図面06 遺構実測図 平坦面 S X02・性格不明遺構 S X03遺構実測図〔2〕 (1/80)
- 図面07 遺物実測図 1;器物、土師器、須恵器、珠洲 (1/3)
- 図面08 遺物実測図 石製品、砾石 (1/2)

図面〇一 遺構実測図

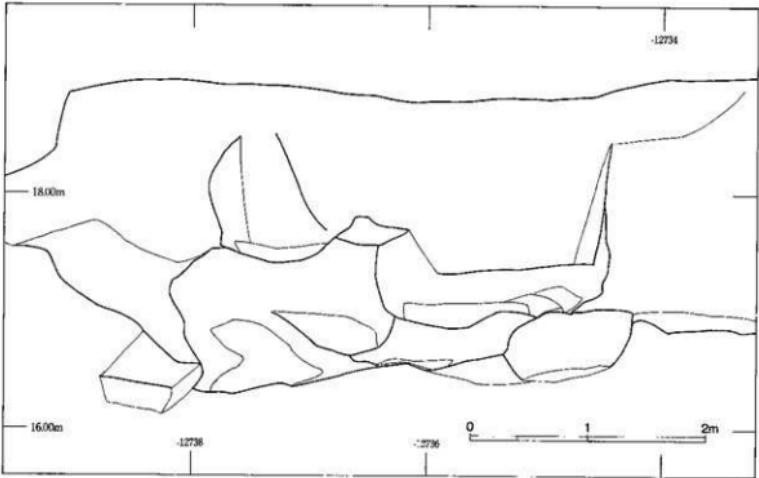
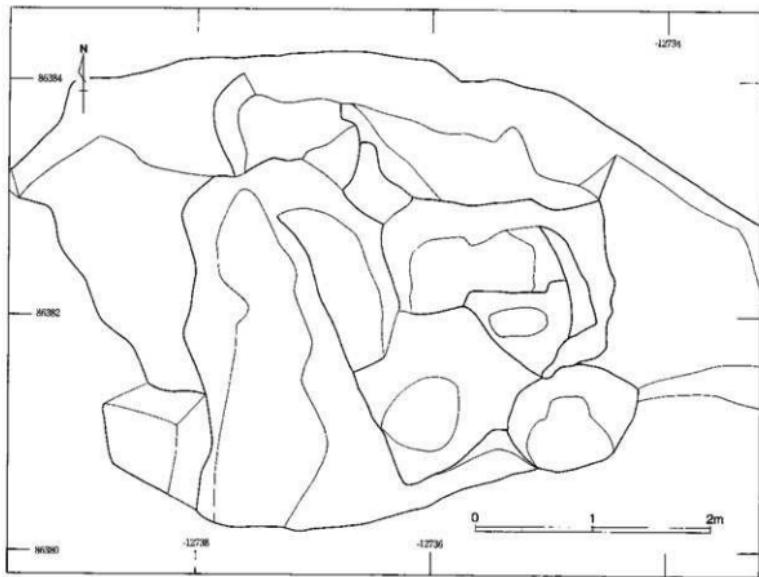
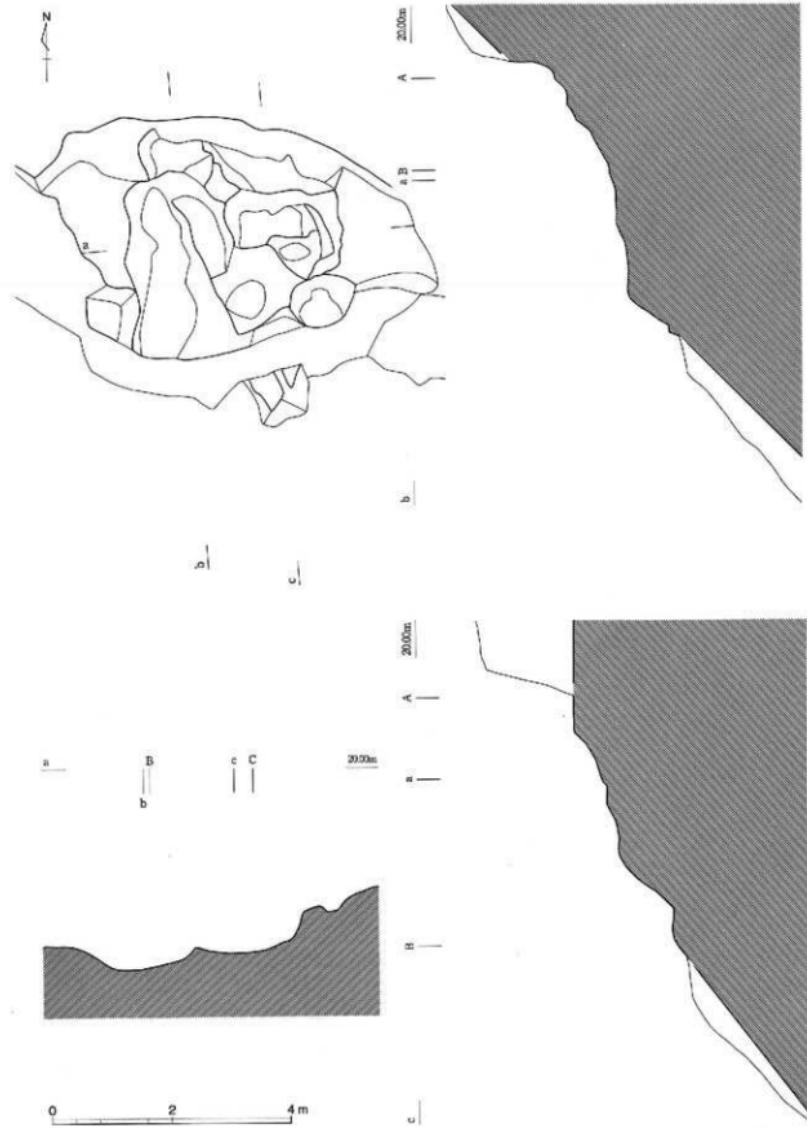


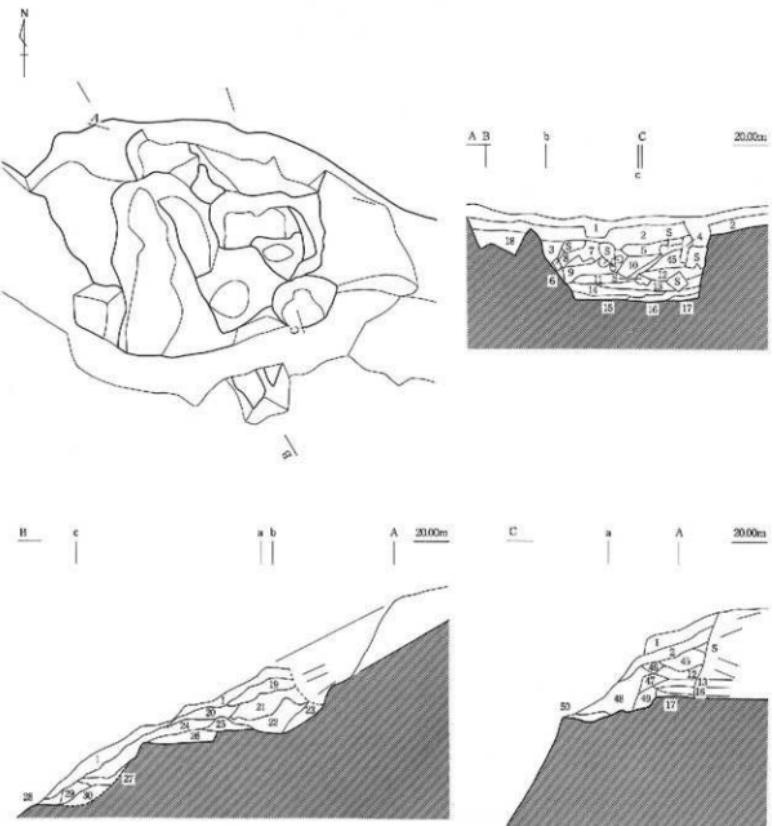
図10 遺構実測図



横穴状遺構S X01 実測図〔2〕

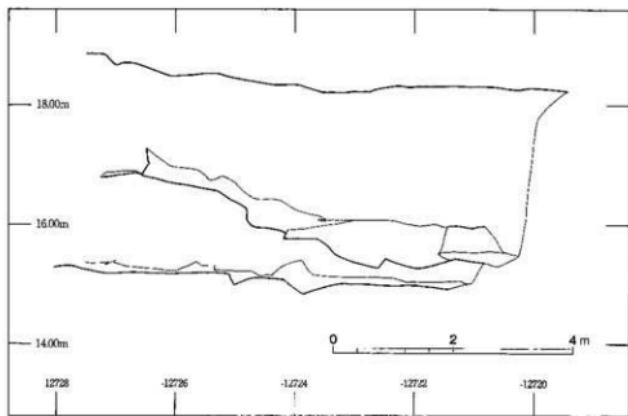
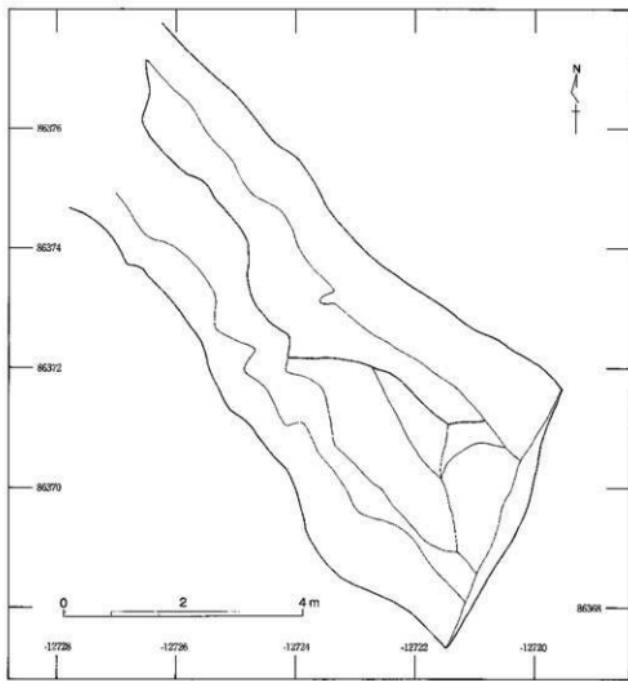
縮尺 1/80

図面〇三 遺構実測図

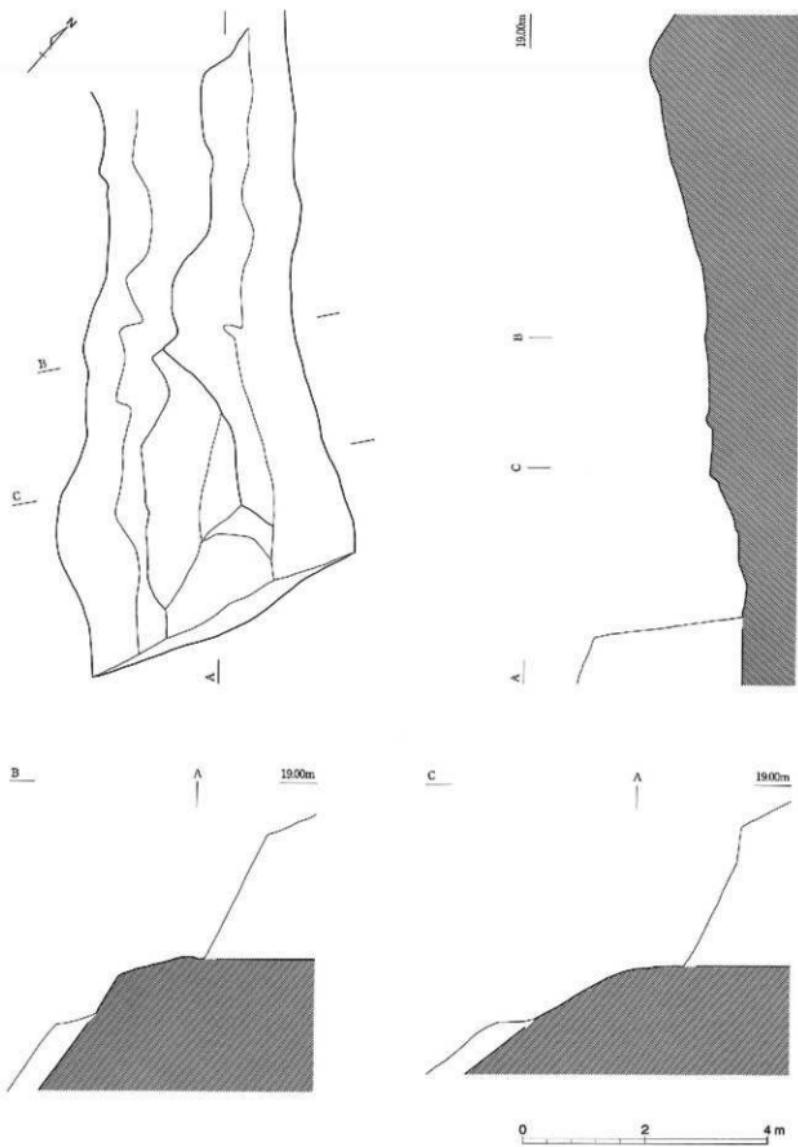


- | | | | |
|--------------------------------------|--|--|----------------------------------|
| 1: 土。 | 13: 暗褐色粘土質土、黄褐色粘土質土、褐泥炭 色粘質土の混合。粘質ブロック含む。 | 26: 暗灰色砂質土。粘質ブロック混入。 | 40: 明灰褐色粘質土。粘質ブロック混入。 |
| 2: 黒灰褐色粘質土。 | 14: 褐古色粘質土。 | 27: 暗褐色粘土質土。粘質ブロック含む。 | 41: 黑褐色粘質土。粘質砂質土混入。 粘質ブロック含む。 |
| 3: 明灰褐色粘質土。 | 15: 褐古色粘質土。 | 28: 暗褐色粘質土。粘質ブロック混入。 | 42: 黄褐色粘質土。粘質ブロック混入。 |
| 4: 暗褐色粘質土。 | 16: 黄褐色粘土質土。粘質ブロック混入。 | 29: 暗褐色粘質土。粘質ブロック混入。 | 43: 黄色砂質土。 |
| 5: 明灰褐色粘質土。粘質ブロック混入。 | 17: 暗灰褐色粘質土。明青色砂質土混入。 | 30: 明灰褐色粘質土。 | 44: 黄色砂質土。 |
| 6: 黄褐色粘土質土。灰褐色粘土質土の混土。 | 18: 暗褐色粘土質土。明青色砂質土混入。 | 31: 明灰褐色粘質土。 | 45: 黄褐色粘土質土。灰褐色粘土質土混入。 |
| 7: 暗褐色粘質土。新褐色粘土質土。粘質ブ ロック混入。 | 19: 明褐色粘土質土。 | 32: 暗褐色粘土質土。 | 46: 黑灰褐色粘質土。粘質ブロック含む。 |
| 8: 暗褐色粘質土。 | 20: 黄褐色粘土質土。粘質ブロック含む。 | 33: 暗褐色粘土質土。 | 47: 黑灰褐色粘質土。粘質ブロック混入。 |
| 9: 黑灰褐色粘土質土。灰褐色粘土質土。褐灰 色粘質土の混一層。 | 21: 暗褐色粘土質土。暗褐色粘土質土混入。 | 34: 暗褐色粘土質土。粘質ブロック混入。 | 48: 黄褐色粘土質土。 |
| 10: 黄褐色粘土質土。新褐色粘土質土。粘質ブ ロック混入。 | 22: 黄褐色粘土質土。 | 35: 暗褐色粘土質土。粘質砂質土。粘質ブ ロック混入。 | 49: 黄褐色粘土質土。粘質ブロック混入。 |
| 11: 黄褐色粘土質土。粘質ブロック混入。 | 23: 黄褐色粘土質土。粘質ブロック含む。 | 36: 暗褐色粘土質土。粘質ブロック混入。 | 50: 黑灰褐色粘土質土。粘質ブロック混入。 |
| 12: 暗褐色粘土質土。褐灰褐色粘土質土。灰褐 色粘質土の混一層。 | 24: 黑灰褐色粘土質土。粘質ブロック含む。 | 37: 暗褐色粘土質土。粘質ブロック混入。 | 51: 黑褐色粘土質土。 |
| | 25: 黄褐色粘土質土。粘質ブロック含む。 | 38: 明灰褐色粘土質土。灰褐色粘土質土の混 土質。粘質ブロック混入。 | |
| | 26: 黄褐色粘土質土。粘質ブロック含む。 | 39: 黄褐色粘土質土。 | |

図面〇四 遺構実測図



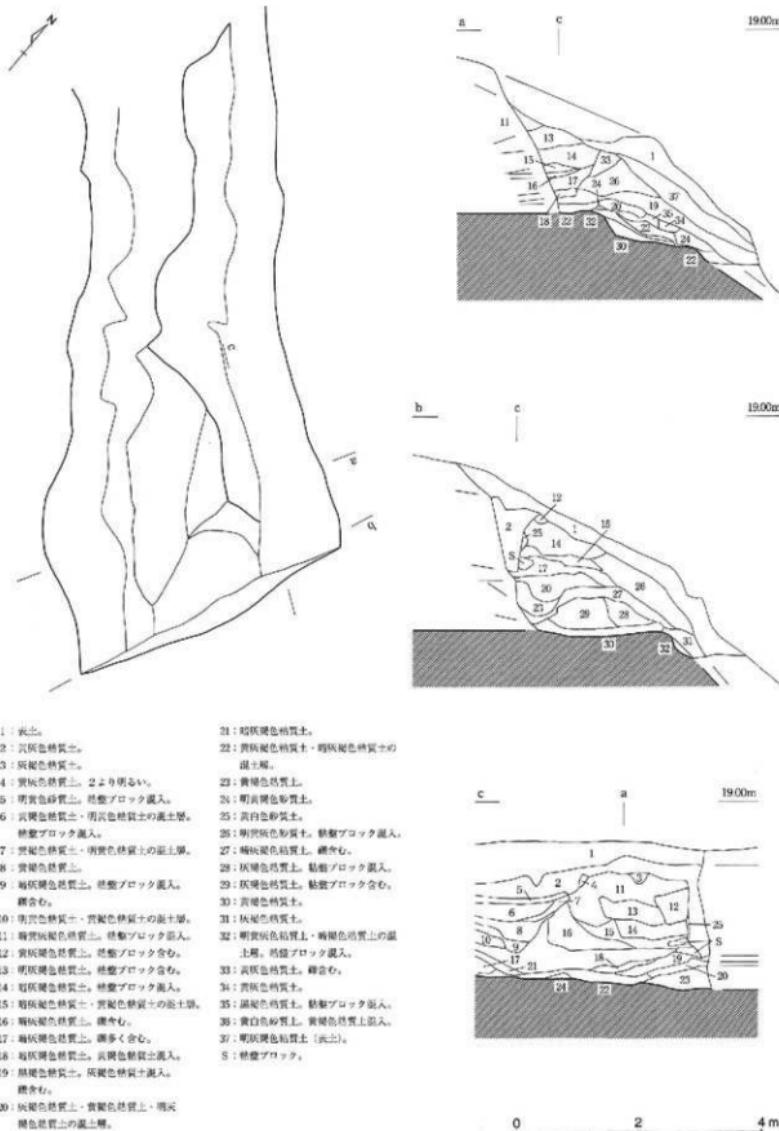
図面〇五 遺構実測図



平坦面 S X02・性格不明遺構 S X03 実測図〔2〕

縮尺 1 / 80

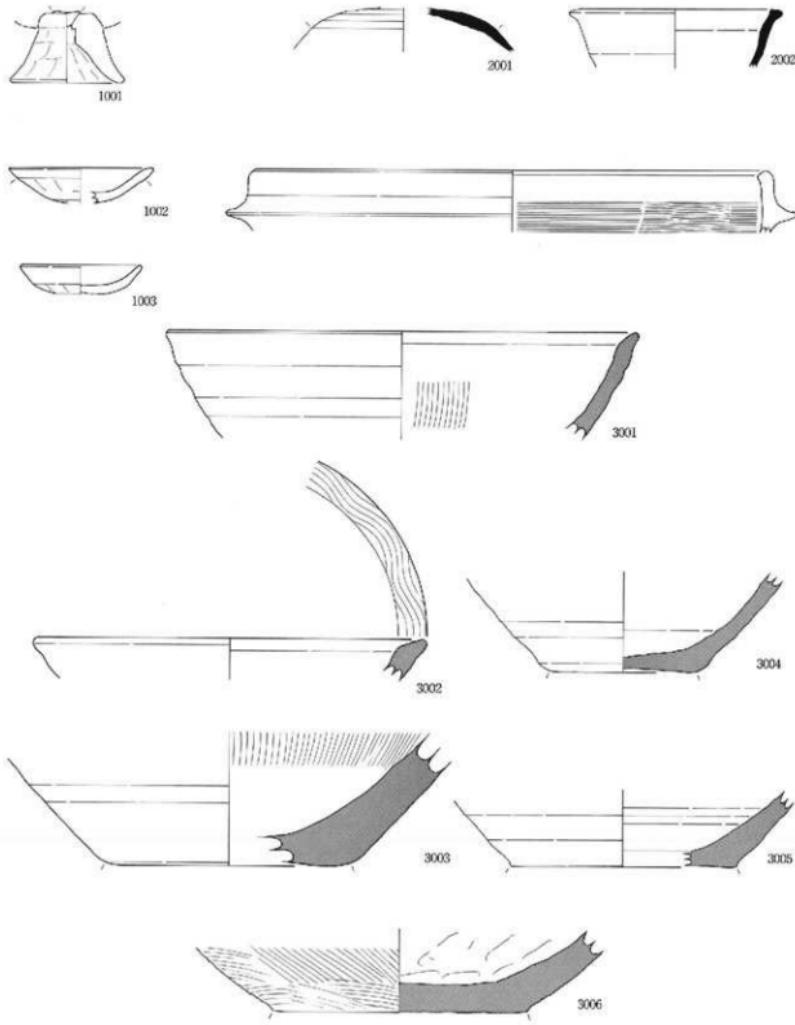
図面〇六
造構実測図



平坦面S X02・性格不明造構 S X03 実測図〔3〕

縮尺 1 / 80

図面〇七 遺物実測図

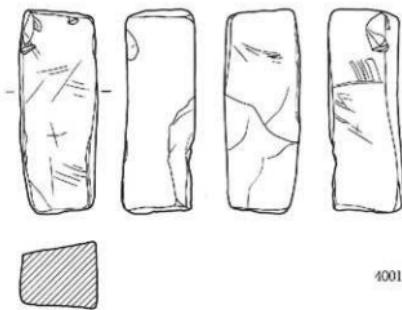


0 5 10cm

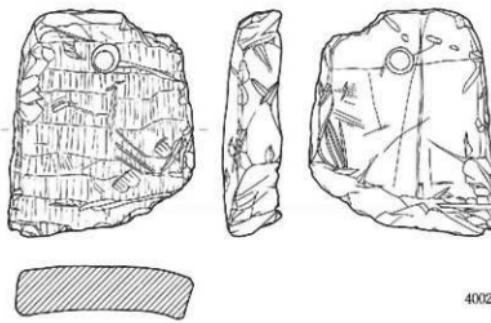
土器類=土師器：1001～1004。須恵器：2001・2002。珠洲：3001～3006

縮尺 1/3

図面〇八 遺物実測図



4001



4002



石製品＝砥石：4001・4002

縮尺 1／2

図 版

図版目次

- 図版01 遺跡写真 1. 遺跡遠景（南）
2. 遺跡遠景（南東）
- 図版02 遺跡写真 1. 調査地区全景（南東）
2. 南齊地区全景（南西）
- 図版03 遺構写真 1. 試掘調査地区全景（東）
2. 試掘調査地区遺構確認状態（南東）
3. 試掘調査地区遺構確認状態（北西）
- 図版04 遺構写真 1. 横穴状遺構S X01全景（南西）
2. 横穴状遺構S X01全景（東）
- 図版05 遺構写真 1. 平坦面S X02・性格不明遺構S X03全景（南東）
2. 平坦面S X02・性格不明遺構S X03全景（北西）
- 図版06 遺構写真 1. 横穴状遺構S X01土層断面（南）
2. 平坦面S X02・性格不明遺構S X03土層断面（北西）
3. 地表風景（南）
- 図版07 遺物写真 1. 器類 = 土師器、須恵器、珠洲
- 図版08 遺物写真 1. 土器類 = 土師器
2. 石製品 = 砥石



1. 遺跡遠景（南）



2. 遺跡遠景（南東）



1. 遺跡全景（南東）



2. 遺跡全景（南西）



1. 試掘調査地区全景（東）



2. 試掘調査地区
造構確認状態（南東）



3. 試掘調査地区
造構確認状態（北西）



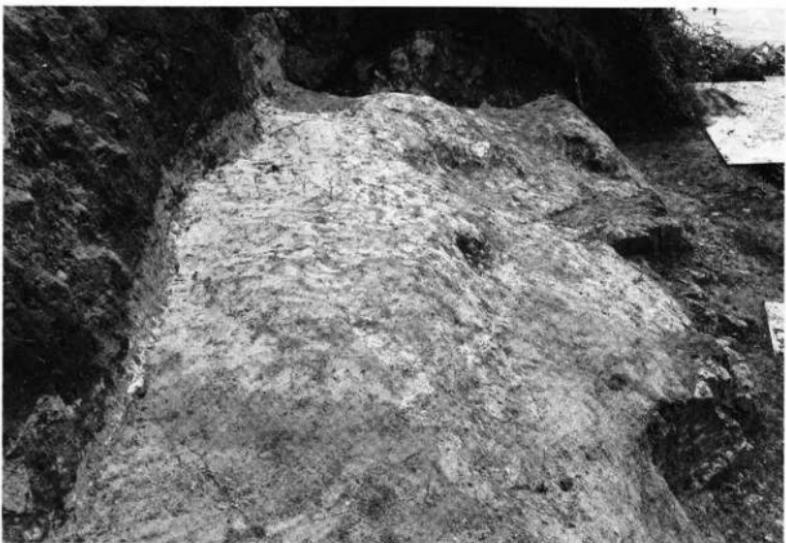
1. 横穴状遺構 S X01全景（南西）



2. 横穴状遺構 S X01全景（東）



1. 平坦面 S X02・性格不明遺構 S X03全景（南東）



2. 平坦面 S X02・性格不明遺構 S X03全景（北西）



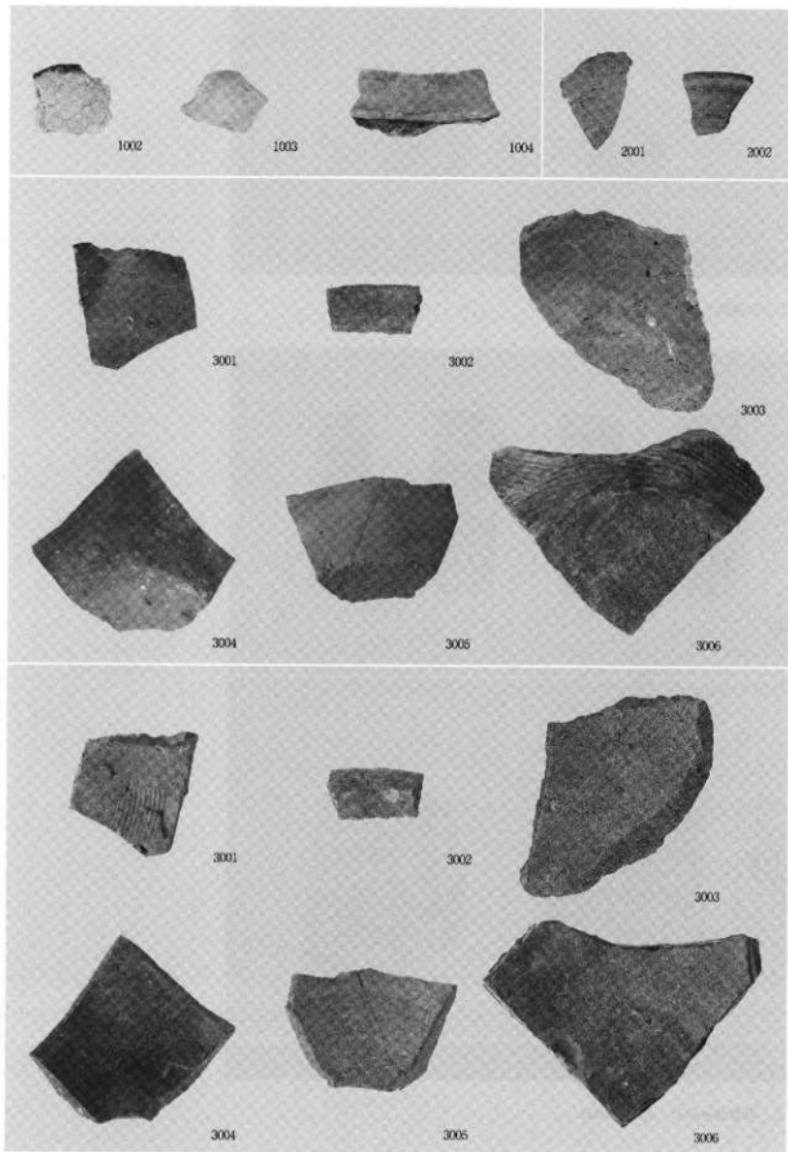
1. 横穴状遺構 S X01
土層断面（南）



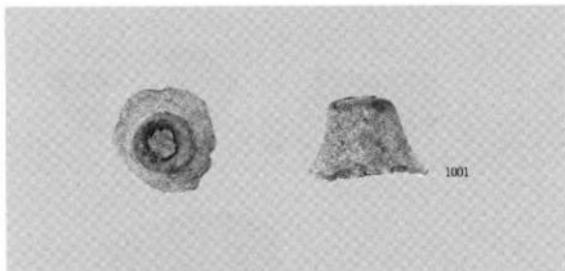
2. 平坦面 S X02
性格不明遺構 S X03
土層断面（北西）



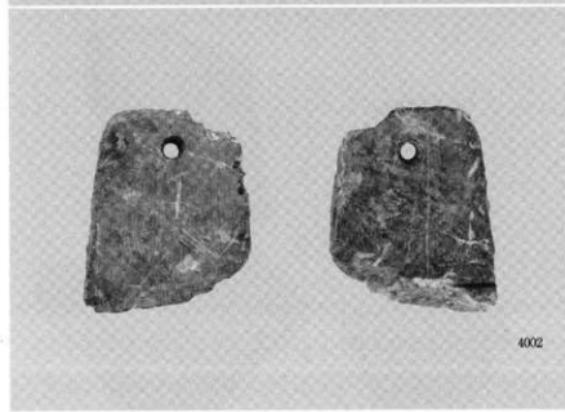
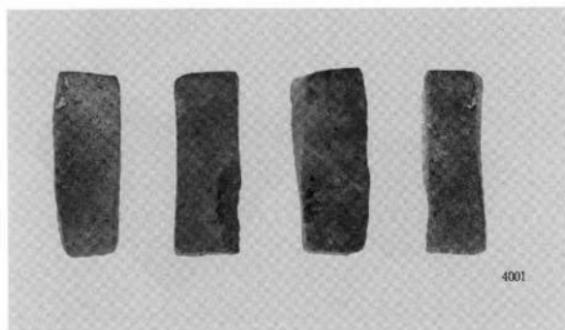
3. 調査風景（南）



土器類 = 土師器：1002～1004、須恵器：2001・2002、珠洲：3001～3006



1. 土器類 = 土師器 : 1001



2. 石製品 = 破石 : 4001・4002

高岡市埋蔵文化財調査報告第15冊

山岡町遺跡調査報告Ⅱ

発行者 高岡市教育委員会

富山県高岡市広小路7番50号

印刷所 株式会社チューイツ

富山県高岡市京田498

2007年11月30日